

「あし・足・脚の表現」

志賀山流における技法の段階的習得過程

志賀山葵・志賀山櫻

西洋の芸能ではその習得過程が理論的に体系的に確立されているが、日本の芸能では明確には示されておらず、稽古を続けているうちに何となく上達すると思われている。しかし、志賀山流では技法習得を効率的に行う為に工夫がなされている。今回は「手習子」と「娘道成寺」の二上り部分を取り上げ足の技法を比較し、その段階的習得過程を考察した。

(1) 日本舞踊における足の技法

「おすべり」「足拍子」「膝拍子」「歩行」「足首
(図1)

(手習子) (道成寺)

(手習子) (道成寺)

(手習子) (道成寺)

○ ● ⊙ ※

(○) おすべり
(●) 左足
(⊙) 右足

⊙ (足拍子、トン)

※⊙ (少しひねる)
⊙ (はっきりとたくさんひねる)

の動かし方」「ひねり」「回転」などがあり、非常に複雑である。特に「おすべり」は日本舞踊独特の技法で古い流儀ほど「おすべり」が多く、全体的に足の技法も複雑になっている。

(2) 志賀山流における工夫

志賀山流は江戸の踊りとして300年の歴史と伝統を持つ日本最古の流儀である。その古い志賀山流では例えば一曲の中に同じ技法が何度も用いられているなど、その曲をマスターすると自然にある技法が身につくように考慮されている。そしてそれをステップに次の曲へと進む。このように、古い流儀の踊りが技法を体系的に習得できるように工夫されている事に注目したい。

(3) 「手習子」と「娘道成寺」の比較

「手習子」寛政4年(1792)初演、4月江戸河原崎座、四世岩井半四郎。作詞、増山金八。作曲、初代杵屋正次郎。この時

(図2) ◎「手習子」「娘道成寺」の足の技法、回数比較

	手習子	娘道成寺
おすべり	14	16
回 転	4 ½	6
足 拍 子	7	9
膝 拍 子	5	4

(図3) 回転に関する比較

※回転を開始する時の位置に注目

歩行に関する比較

※(両足を揃える事)
①(片方の足を上げて下ろすと同時に反対の足をずらす事)

代、二世中村仲蔵。家元十代目、二世志賀山勢。

「娘道成寺」宝暦3年(1753)初演、3月江戸中村座、初世中村富十郎。作詞、藤本斗文。作曲、初代杵屋弥三郎、作十郎。この時代、初世中村仲蔵。家元五代目、志賀山お俊。

「娘道成寺」から約40年後に「手習子」が出来ていて、「手習子」には「娘道成寺」の二上りがほとんどそのまま使われている。つまり「娘道成寺」の二上り部分を意図的に「手習子」に使ったことになる。役柄は「手習子」は町娘で役の性根もつかみやすいが、一方「娘道成寺」は白拍子の姿を借りた蛇と複雑である。同様に足の技法も「娘道成寺」の方が複雑である。

(図1)

前頁の図は実際に足の動きを図にしたものである。回転、ひねり、歩行、おすべりなど全てにおいて「娘道成寺」の方が「手習子」より複雑ではあるが、足の技法の数を比較した表を見ると、全体的に数が非常に近い事がわかる。つまり、これだけ似ているという事から明らかに「手習子」が「娘道成寺」の踏み台となるように意識して二世中村仲蔵が「手習子」に振りを付けたことが窺える。

(図2)

また、参考資料としてVTR(「手習子」と「娘道成寺」を同時に踊っている。)を提出した。

VTR協力者 「手習子」……志賀山 妙

VTR、資料などから非常に上手に「手習子」が作られている事が実感できる。まさしく「手習子」は「娘道成寺」へと進むための準備運動なのである。

(図3)

左の図は歩行と回転について比較したものであるが、この時の上半身の動きで町娘と白拍子をはっきり踊り分けている事も興味深い。今回は足の技法に限ったが今後追求してみたいと思う。

(4) 考察

「手習子」と「娘道成寺」の足の動きを比較したが、実際に踊ってみると「手習子」を習ってから「娘道成寺」を習うと、わりあいに楽に体が動くが、いきなり「娘道成寺」を習うと手も足も出ないという状態である。また、一つの技法を習得する為に同じ振りが一つの曲の中で繰り返し使われるなど、次の段階に進みやすく工夫されている。今回は「手習子」と「娘道成寺」の比較に限定したが、志賀山流にはその外にも段階的習得のための様々な工夫がある。今後、先人の大きな遺産ともいえる、この隠された偉大な工夫を追々に追求していきたいと思う。